

## 5. クルマエビ資源培養事業

### I 調査目的

本県沖日本海沿岸域におけるクルマエビ生産を向上するための手法を究明し、沿岸漁業経営の安定に資する。

### II 調査内容

1. 調査期間 昭和53年6月～10月
2. 調査場所 陸上水槽及び鰹ヶ沢沿岸
3. 担当者 技師 小田切 譲 二  
技師 原 子 保
4. 調査項目 (1) クルマエビ中間育成  
(2) クルマエビ種苗放流

#### 5. 調査方法

##### (1) クルマエビ中間育成

クルマエビ稚仔を水槽内において飼育し、減耗率等の生態を調べる。

##### (2) クルマエビ種苗放流

クルマエビ稚仔を購入し放流する。

### III 調査結果

#### (1) クルマエビの中間育成

クルマエビの稚仔（全長1.5～2.5 cm）、12,000尾の中間育成を試みましたが、取水による海水の塩分濃度が低く、飼育を始めて3日後全個体が斃死した。

#### (2) クルマエビ種苗放流

新潟県栽培漁業センターから、クルマエビの稚仔（全長4～6 cm）60,000尾を陸上輸送（1トンの海水に対し60,000尾の稚エビを収容し、水温を12.5～15.4℃に保ち、DOを過飽和状態にして、約16時間かけて鰹ヶ沢に到着したが斃死した個体はみられなかった。）し、到着1時間後に海上時化のため鰹ヶ沢港内に全数放流した。（水温15.2℃）

クルマエビの中間育成は、取水設備不備のため飼育水の塩分濃度が低く実験の目的を達成すること

ができなかった。

また、再捕率、減耗率等を解明するためには、放流後の追跡調査が必要であるが、放流を実施するためには全長10cm以上の個体が必要となる。

なお、3月下旬、青鵬丸によって鯨ヶ沢前沖、水深40～50 m 付近の海域で、15cm前後のクルマエビの越冬個体が数尾採捕されたが、放流したものかどうか確認することはできなかった。